

ドイツ・フレセニウス大学と本学との 国際交流に対する学生の印象の比較調査

中川 和昌・角野 善司・Christopher TARN・浅香 満

(受理日 2014年9月26日, 受稿日 2014年12月18日)

The comparative of students' impression toward the international exchange programs between Fresenius University and Takasaki University of Health and Welfare

Kazumasa NAKAGAWA・Zenji SUMINO・Christopher TARN・Mitsuru ASAKA

(Received Sept. 26, 2014, Accepted Dec. 18, 2014)

1. はじめに

2012年度よりドイツ連邦共和国(以下、ドイツ国)のフレセニウス大学と高崎健康福祉大学(以下、本学)の理学療法学科間交流が開始となった¹⁾。グローバル人材の育成が大学には問われており、学部生からその意識を育てることが基本スキームとして挙げられており²⁾、国際化の進む現代において、本学においても開設当初より国際的視野の拡大、国際交流の取り組みが重要であると考えられている。理学療法学生としても、今後理学療法士としてその視野が広がる可能性を学生の頃から拡大していくことはとても重要であると報告されている³⁾。

フレセニウス大学はドイツの5都市に分散して存在する大学であり、メディア学部、ビジネス学部、薬学部など9つの学部で構成されている。理学療法学科は健康学部の中に位置付けられており、健康学部にはその他作業療法学科、言語聴覚学科、徒手療法学科、医療事務学科な

どが存在する。フレセニウス大学と本学は2012年5月に教育・学術交流協定を結び、2012年度、2013年度の9月に本学学生がドイツ国を訪問し、2月にフレセニウス大学の学生が来日してその交流を深めている。今後の展開として共同研究や教員間交流の充実等が期待されているが、過去2年間実施してきた学生間交流をより充実したものとすることも重要な課題であり、そのために両大学学生の印象や感想を分析することは有意義である。

本研究の目的は、平成25年度に参加した両大学学生への研修後アンケート結果を比較検討することで、両大学学生が抱いた印象の違いについて整理し、今後の両大学の国際交流プログラムの発展・継続に繋がるように考察することである。

2. 研修概要

平成25年度における本プログラムは2013年

9月のドイツ国訪問研修、2014年2月の来訪研修に分けられる。

1) 訪問研修

研修期間は2013年9月17日～27日の11日間であった。スケジュールを表1に示す。研修場所は大学の理学療法学科キャンパスが所在するイトシュタイン町、ミュンヘン市の2つのキャンパスを訪問した。研修に参加した学生は本学保健医療学部理学療法学科3年生14名(男子3名、女子11名)であった。理学療法学科の教員2名および国際交流委員の教員1名(通訳兼コーディネーター)が引率教員として同行した。なお今回の国際交流の対象となった学生は、大まかな理学療法基礎教育は修了しており、今後はより専門性の高い科目、卒業研究、臨床実習が主に履修していくという状況であった。訪問前後には十分に研修を実施し、知識の共有や、学びの再確認ができるように十分な研修を実施した。担当教員はコーディネーターを担った。

研修内容は昨年度¹⁾より講義体験が多かった(図1, 2)。一方、施設見学はあまり体験することが出来なかった。その他昨年同様、キャンパスツアーや文化体験、両大学相互を紹介しあう

ためのプレゼンテーション、学生間交流を組み込んだプログラムであった。また学生はドイツの学生の自宅やアパートにホームステイした。



図1 授業体験(徒手療法)



図2 実習体験(ヘルスプロモーション)

表1 ドイツ研修スケジュール

	午前	午後	備考
9/17(火)	成田発	イトシュタイン着	
9/18(水)	キャンパスツアー, 両大学プレゼンテーション, 学生間交流		ホームステイ
9/19(木)-20(金)	講義参加	講義・実技授業参加	ホームステイ
9/21(土)	地区探索, 観光	ホームステイ	
9/22(日)	移動	ミュンヘン着	ホームステイ
9/23(月)	歓迎会	キャンパスツアー	ホームステイ
9/24(火)	講義参加	地区探索, 観光	ホームステイ
9/25(水)	講義参加, 施設見学	学生間交流	ホームステイ
9/26(木)-27(金)	移動(フライト)～成田着～帰校		機内泊

*日付は全て2013(平成25)年

2) 来訪研修

研修期間は2014年2月17日～2月26日の10日間であった。スケジュールを表2に示す。研修に参加したフレセニウス大学の学生は11名(男子6名、女子5名)で、理学療法学科(department of physiotherapy)の学生10名、作業療法学科(department of ergotherapy)の学生1名であった。ミュンヘンキャンパスの学生が6名(男子3名、女子3名)、イトシュタインキャンパスの学生が5名(男子3名、女子2名)、学年別では2年生8名、3年生3名であった。また引率教員としてミュンヘンキャンパスの理学療法学科長1名が同行した。

研修内容は大学における講義・実習体験、種類の違う施設を3施設見学した(図3)。その他、文化体験や学生間交流を組み込んだプログラムであった。また日本においても同様に、ドイツの学生は極力本学学生の自宅やアパート、大学の国際交流センターで依頼したホストファミリーの自宅等にホームステイするように手配した。

また本年度の国際交流研修のまとめとして、両国の文化や医療制度、理学療法およびその教育といったテーマで、両大学の学生合同のグ

ループによるグループワークを実施した。後日、各グループの成果をポスター発表するとともに、意見交換会を実施し、お互いの国で学んだ



図3 施設見学(小児施設)



図4 学生合同グループ発表

表2 フレセニウス大学来訪スケジュール

	午前	午後	備考
2/17(月)		成田着	大雪のため東京泊
2/18(火)	群馬移動 ウェルカムセレモニー	高崎市長表敬訪問	ホームステイ
2/19(水)	授業体験	文化体験(だるま作り等)	ホームステイ
2/20(木)	施設見学	学生間交流(スポーツ)	ホームステイ
2/21(金)	施設見学(2施設)	グループワーク	ホームステイ
2/22(土), 23(日)		草津観光等	ホームステイ
2/24(月)	発表会・意見交換会	学科間パーティー	ホームステイ
2/25(火)-26(水)		東京観光	2/26 成田発

*日付は全て2014(平成26)年

知識を共有・再確認し、各自の学びを深める機会を設定した(図4)。

3. 方法

両大学の各学生に対し、研修終了後にアンケート調査を実施した。以下の項目に対して Visual Analogue Scale (VAS) を用いてその理解・満足度を回答する方法にて実施した；1) 学生間交流、2) 両国の理学療法の違い、3) 両大学の理学療法教育の特徴、4) 両国の文化の違い、5) 自国の文化、理学療法の現状の理解、6) お互いのコミュニケーション、7) 講義・実技等の授業体験、8) 理学療法現場の見学・体験、9) 全体を通して。各項目を100=完璧に達成できた(perfect)、0=全くない(none)で評価した。その他自由記載でのアンケートも同時に実施した。

なおアンケートは無記名、個人情報が出せない状況で提出できるように配慮し、両大学学生ともに提出をもって本研究に同意する旨を説明した上で提出している。

各項目における VAS の結果を両学生間で比較検討した。統計処理として対応のない t 検定

を実施し、統計ソフトは IBM SPSS Statistics ver.21 を使用し、有意水準は 5% とした。

4. 結果

VAS の結果を表 3 に示す。全体的に両大学ともに参加学生の反応は良好であった。学生同士の交流と理解(ドイツ 93.0±8.21、本学 85.7±8.57)で有意差が認められた。また各国の理学療法の違い(ドイツ 92.9±5.41、本学 77.5±9.90)、理学療法教育の特徴(ドイツ 90.5±4.87、本学 78.6±9.60)に関しては、ドイツの学生の方が優位に理解できたと回答していた。コミュニケーションに関しては大きく結果に相違がみられ有意差が認められた(ドイツ 67.9±14.75、本学 81.9±12.55)。

また自由記載の結果(一部)を表 4 に示す。今後の提案として、ドイツの学生は本学学生の英語能力の改善を、本学学生は医療現場の見学を訴えており、加えて両大学ともにホームステイ先とのより多くの交流を望んでいた。さらに本学学生は本研修を通じて、自らの人間的な成長を訴えていたのが特徴的であった。

表 3 アンケート結果

	内容(詳細は文中参照)	ドイツの学生(n=11)	本学学生(n=14)	p 値
問 1	学生同士の交流と理解	93.0± 8.21	85.7± 8.57	0.041*
問 2	各国の理学療法の違い	92.9± 5.41	77.5± 9.90	<0.001**
問 3	理学療法教育の特徴	90.5± 4.87	78.6± 9.60	<0.001**
問 4	文化の違い	89.5± 8.81	82.8± 9.87	0.084
問 5	自国の文化、理学療法の現状	88.4± 9.94	80.4±12.64	0.092
問 6	コミュニケーション	67.9±14.75	81.9±12.55	0.021*
問 7	講義・実技等の授業体験	89.5±10.42	85.9±12.62	0.441
問 8	理学療法現場の見学・体験	90.3± 8.60	81.1±14.08	0.057
問 9	全体を通して	96.2± 6.03	91.6± 6.44	0.083

平均±標準偏差, *: p<0.05, **: p<0.01

表4 自由記載アンケート結果（一部抜粋）

問 今後より良くしていくための提案および指摘
<ul style="list-style-type: none"> • Japanese students' English skill should be improved. • We could stay any time longer in host families to see more Japanese culture and daily life. • I hope it's mainly because of the snow but it could be nice to spend all the nights with guest students instead of the apartment. • たくさんの町に行くことが出来たが、移動時間が長くて疲れた。 • 大学の見学をすることが出来たが、医療現場をもう少し見学することが出来たらよかった。 • スケジュールが詰まっており、ホームステイの人達と交流する時間が少なかったのが残念。
問 その他（感想等）
<ul style="list-style-type: none"> • The program was a very good mixture between academical program and cultural experience. It was a very interesting and new experience. To have the chance to get to know Japanese culture was awesome. • This exchange gave me the possibility to be more than just a normal tourist. We had the possibility to combine culture, tourism and new friendships. I had a good time in Japan and I will never forget my trip to Japan. • We saw a lot of different hospitals and institutes and so we can see how Japanese physiotherapists are working. Also the daily life in our host families was very nice. • It is a wonderful opportunity to get to know each other, the culture and the difference of physiotherapy between Germany and Japan. It was so nice staying here. • It was very interesting to get to know the cultural specials in Japan. The habits are quite a bit different. I have the respect that everybody has to other people. • ドイツと日本の文化・医療・人柄の違いを知ること、自分を見つめ直す良い機会になった。 • 帰国してから視野が広がり、物の見方や捉え方、自己アピールの仕方などが変わった。 • 友達になった外国の友人との交流をこれからも続けていきたいとします。 • 英語の勉強不足だった点を反省するが、積極的に話しかけることでドイツ人は理解しようとしてくれて、とても楽しむことができた。 • ドイツの学生もドイツもすごく大好きになった。色々なことを感じたり、刺激を受けたり、チャレンジ精神も強くなった。人間的にも少し成長できたと思うし、もっと成長したいと思った。

* 英語表記はドイツの学生の回答、日本語表記は本学学生の回答

5. 考察

両大学の参加学生は、本研修に対して全体的に良い反応を示しており、本研修プログラムは有用であったと思われる。特に文化体験のみならず、ホームステイを通じて実際の日常生活等を体験してもらったことは、両国の違った文化や背景を理解する上で良かったと思われた。大澤ら⁴⁾も、宿泊先の満足度や日本文化の理解において、ホームステイは非常に寄与する、と報告している。両大学学生からもより深いホームステイでの経験を求める意見が出ており、今後

も可能な範囲で体験できるように取り組むことが良いと思われた。

理学療法に関するアンケートに関しては、ドイツの学生の方が本学学生より理解を深めていた。これは本学学生がドイツで研修した際には授業体験が多く、実際の施設見学等は少なかったのに対し、今回のドイツの学生の日本での研修においては、極力様々な種類の施設を見学し、授業体験も実施できたことが影響していると考えられた。相手の国の理学療法を考える、自国との違いを考える上で、実際の施設見学を取り入れることは非常に有益であったのではないかと

と考えられた。ドイツの理学療法は日本の理学療法に比べ専門性に秀でているのに対し、日本の理学療法は日常生活動作への関わりや、包括的支援の面でその役割を発揮する場面が多く、口頭での説明のみならず、実際の現場を様々な場面で見学してもらうことがその理解に有効であったと考えられた。一方で本学学生にとっては、ドイツにおける理学療法現場の見学機会が昨年と比較して少なかったのは課題であった。昨年⁷⁾はドイツ国における理学療法現場の見学として、日本では一般的ではない開業理学療法士の活動や、フィットネス施設の理学療法現場を見学することが出来たが、今年度は施設見学の機会が少なかった。現場の様子を実際に「見る」ことはやはりよい学びにつながるため、今後は積極的に交渉していくことが課題である。

両大学学生の印象で最大に異なる点はコミュニケーションの問題であった。本学学生にとっては「英語が話せなくても何とかコミュニケーションが取れた」、というプラスの側面が多かったのに対し、ドイツの学生にとってはもう少し深くコミュニケーションをとる上で、本学学生の英語能力の低さは妨げと感じている様子であった。田口⁸⁾は日本の理学療法士、学生の語学レベルは低く、これが国際的進出の機会を失わせている、と報告している。また松本⁹⁾は、普通の生活では英語を使う機会もない日本で、英語使用への明確で効果的な動機付けを用意しないまま、ただ「英語が使える日本人」になることを期待し、強制している、と日本における英語教育に苦言を呈している。日常会話的なレベルの会話であればお互い何とかなっている様子であったが、より交流を深くしていくために、コミュニケーションの問題は今後の検討課題である。根本的な解決には国の教育制度等に関わっ

てくる大きな問題であるが、本研修を通じて少しでも英語でのコミュニケーション能力を高めていけるように計画することが指導者側として要求される。牧²⁾は、共通言語としての英語表現力を身に着けることはグローバル人材として避けて通れない必須要素であるが、「控え目」が尊ばれる価値観を持った日本人には、特に発信力、表現力を鍛えることが求められている、と報告しており、今後の対策として、事前研修から積極的にドイツの学生とコンタクトをとり、実際に会った時の「控え目」な状況を多少でも軽減するとともに、積極的な発言を日常の教育現場から求めていく必要があると考えられた。

さらに本学学生の感想において、人間的な成長が認められていたのは特徴的であった。山田⁷⁾は、日本人が国際的に通用する資質とは何か考える機会を与え、それ以降の様々な学習の動機づけになりうる、と報告しており、今回の研修が国際的な活動のモチベーションに直結するかどうかは疑問であるが、少なくとも今後の意欲向上につながることを期待できる。理学療法士のキャリアデザインを考える際に、わが国の理学療法士が置かれている現状を踏まえた検証が不可欠で、大学の教育としてキャリア教育や職業活動への準備を含んでいる、との報告⁸⁾からも、このような国際交流を通じて学生のキャリア教育に多少なりとも効果があったのではないかと考えられた。また日本とドイツの教育の違いとして、ドイツは専門職業別労働市場に基づく教育背景があるのに対し、日本は学歴・学校歴別労働市場に基づくユニバーサル・アクセスの段階であるのと同時に、保健医療、理学療法の分野においては職業対応的な学士教育が重視されている傾向も見られる⁹⁾。社会的な教育面の視点からも本研修がもたらす効果に

ついて、お互いの国の視点から双方に有効なものとなるように本交流プログラムを検討していくことも課題であると考えられた。

6. おわりに

本学とドイツ・フレセニウス大学との理学療法学科における国際交流事業において、平成25年度の研修に参加した両大学学生の研修後アンケート結果を比較検討した。ドイツの学生は日本の文化や両国の理学療法の違いについて理解を深め、本学学生は社会的な側面における成長がみられ、本研修は両大学の参加学生に好影響を与えていた可能性が示唆された。しかしながら英語におけるコミュニケーション能力に関しては本学学生において課題が残る結果となった。

2年間かけて築きあげてきた両大学の良好な関係性の上で、今後の更なる内容の充実・発展が両大学の学生に有益な教育効果をもたらされることが期待される。

謝辞

今回の国際交流プログラムを実施するにあたり、多大な御協力を頂いた両大学関係者の皆様および各ホームステイ先の方々、および国際交流委員各位に深く感謝致します。また本プログラムは「独立行政法人日本学生支援機構 留学

生交流支援制度（ショートステイ、ショートビジット）採択プログラム」の支援を受けて実施したものである。

引用文献

- 1) 中川和昌, 角野善司, ターン・クリストファー, 芝山江美子, 浅香 満: ドイツ・フレセニウス大学と高崎健康福祉大学における学生間交流—平成24年度理学療法学科国際交流プログラム報告一, 高崎健康福祉大学紀要, 13, 267-275, 2014.
- 2) 牧かずみ: 学部医学生の国際交流活動を推進する意義, 信州医誌, 61(6), 409-417, 2013.
- 3) 長谷川真人: 理学療法分野における学生交流の状況, 理学療法科学, 17(1), 59-63, 2001.
- 4) 大澤諭樹彦, 工藤俊輔: 国際交流における短期研修事業の効果的な取り組み—タイの海外研修生の受け入れ経験から—, 秋田大学医学部保健学科紀要, 13(1), 83-89, 2005.
- 5) 田口順子: 日本の理学療法の国際化, PT ジャーナル, 36(9), 709-714, 2002.
- 6) 松本青也: 英語教育における共同プロジェクト, 愛知淑徳大学論集—コミュニケーション学部編一, 6, 35-45, 2006.
- 7) 山田典子, 川内帰会, 千葉たか子, 渡部一郎, リボヴィッツ志村よし子: 健康科学教育センター国際科の発展途上国における地域交流の現状—国際交流事業の教育的意義の検討一, 青森保健大雑誌, 8(2), 267-274, 2007.
- 8) 内山 靖: 理学療法士としてのキャリアデザイン, PT ジャーナル, 46(5), 393-402, 2012.
- 9) 吉本圭一: 現代大学における職業教育目標の探究, 九州大学大学院教育学研究紀要, 4, 83-101, 2002.